

教育について学ぶ

山本哲朗

要旨

国家百年の計と言われるぐらい教育改革は難しい。筆者は平素から教育・学問・自然科学に関する書籍に目を通し、感銘を受けた点については教育の場で学生に伝達するように心がけている。

わが国では、初等教育から高等教育において学生の学力低下が顕著化し、それに対応すべき授業が希求されている。またその原因も模索されている状況である。そのために教育や授業法に関する多くの書籍が刊行されている。教育学を専攻した教員は別として、大学の教員の多くは教育学について学ぶ機会は少なかったはずである。筆者もその一人であり、教育や授業に関する知識や現状を学ぶことが大切であると考えている。本論文では、教育や授業に関する書籍のいくつかを取り上げ、大学の教育や授業に有益であるものは活用すべきであることを提言している。

キーワード

教育、授業、教員、学習意欲、読書

1. まえがき

初等教育から高等教育までの教育や授業において、学力低下や教師の教育力不足等々の問題は、教育界はもちろん社会的にも深刻化している。言うまでもなく、わが国の教育は、初等教育から高等教育まで積み上げ方式で実施され、とりわけ初等教育で実施されている、ゆとり教育に厳しい批判の眼が向けられている面がある。さらに、授業のできない教師の増加、校長の責務に耐えられないために起きる降格人事も行われている。私見ではあるが、これらの事態は教師側だけの問題ではなく、種々の社会的背景によってもたらされる児童・生徒の方にも憂慮すべき事態が起きていると思う。筆者は先の論文¹⁾において教育・学問・自然科学に関する書籍から学んだことについて、それらの著者の主張を紹介するとともに、筆者の考えを述べている。

本論文では、教育や授業に関する書籍の中から著者の主張したいことを引用し、それらのうち大学教育や授業に活用できるものは今後、前向きに検討すべきであることについて筆者の意見を述べることにした。

2. いま求められる“教師力”とは²⁾

白梅学園大学学長無藤隆氏は中央教育審議会その他の学校教育の中で、いま、改めて、教師の資質能力を「教師力」という表現を用い、その確かな向上を目指そうとしている。

優れた教師の条件は中央教育審議会の答申において「あるべき教師像」について論じられている。特に次の三つの要素が重要視されている。1) 教職に対する強い情熱である。教職への使命感や、子どもたちへの愛情と責任感である。2) 教育の専門家としての確かな力量であり、子ども理解力、児童・生徒指

導力, 集団指導の力, 学級づくりの力, 学習指導・授業づくりの力, 教材解釈の力などからなる。3) 総合的な人間力であり, 豊かな人間性, 常識と教養, 礼儀作法をはじめとして対人間係能力, コミュニケーションの能力である。

著者の言及するように, ある意味では当然のことばかりである。大事なことは, 一つはそういった基本を改めて振り返り, 教師の力量が学校改革の基軸なのだということを確認するということである。筆者は大学教育においては, 一般に生徒への愛情の不足, 学科づくり力の不得手, 総合的人間力に欠落している面があると思う。

3. ふだんの生活につながる学習習慣づくりを³⁾

早稲田大学教授安彦忠彦氏はインタビューの中で, 学習習慣と学習意欲とを次のように連関させている。意欲とは興味・関心, 生理的にいえば探索欲求を基本にしている。一方, 習慣とは, しつけとして働きかけることによって行動が身につく。このように両者は質的に異なるものであるから「意欲があれば習慣が形成されるだろう」とすぐにつながっていくものではない。たいせつなことは, 子どもの発達段階の早いうち(小学校三年生ごろまで)から学習習慣を形成しておくことにある。

さらに, 安彦氏は家庭学習へのサポートの必要性, 学習習慣の形成はメンタル面にも効果を及ぼすことを述べている。大学生が十分に予習・復習するのは学習習慣のイロハであることは明白であるが, バイト等でそれが十分に実行されているとは思わない。これこそ, 大学教育の問題の根幹ではないでしょうか。

4. 大学教師の自己改善 教える勇氣⁴⁾

著者 P.J. パーマーは本書の序章において次のように述べている。“教師は, その労力に対して報われるべきであり, 事務的な拘束から開放され, 教育の自由を保障されたい。十分な教材が与えられるべきです・・・教育を改革するためには, 人間の心を慈しみ, 鍛えることが根底にあることはいまでもありません。”山口大学が法人化され, 事務的作業時間の拘束力が増えていることへの警鐘とも受け止められる。さらに, “教育を行うためには三つの重要な要素—知性・感性・精神が必要で, それらはいずれも無視することはできません。教育を知性に限れば, 冷たい抽象の世界となるでしょう。そして, 教育を精神に限れば, 世の中との接点を失います。知性と感性と精神は全体性を生み出すために互いを必要としています。これら三つの要素は, 人間がそして教育が最善の状態にあるときはいつも絡み合っています。”著者は本書でその絡みについて議論している。筆者にとり, 教育をこのような観点から考えたことはなく, 教えられる点の多い著書である。

5. 教えること, 裏切られること⁵⁾

著者山折哲雄氏は十一章「師の人格をいかに相続するか」において, 師と弟子との関係について次のように述べている。“弟子は, 氏の全体をはたして受けつぐことができるのか。弟子は, 師の本質を継承することがはたしてできるのか。それが弟子と師のあいだに演じられる, 最大のジレンマにみちた心の劇であった。容易にそれは解きたい謎であった。それはできる, とする過激な弟子がたしかにいた。それは可能である, とする傲慢な師資相承の主張者が存在した。

それにたいして, いや, そんなことはできぬと反論する弟子もいた。氏とは一回かぎり

の存在であるとする立場に拠る弟子である。このような弟子にあっては、師の本質はその一部を継承することができるだけである。”

大学教育において師（教員）と弟子（学生）間でも同様な関係が成り立つと思うが、先生の授業内容のみならず、感動したことや生き方⁶⁾、⁷⁾ についての話は学生諸君が将来の糧にすることは大切なことではないだろうか。

6．創造力育成の方法—JABEE 対応の創成型教育⁸⁾

著者は、本書のまえがきで学生と若い技術者へ次のように語っている。“21世紀を担う諸君は専門知識を駆使して、あるいは専門知識を陵駕した創造力つまり独自に課題を発見し、解決策を探索して新製品・新技術を創成する能力が要求されている。本書では、技術者に要求されるこの創造力＝課題探索・創成能力を訓練しようとするものである。”

著者は創造力の構成要因として8個の能力を挙げている。それらは美意識、独創力、実現力、分析力、発見力、忍耐力、実行力、指導力である。これらの既成概念を打ち破る能力＝創造力は、学生が受けてきた教育と個性に密着した能力であり、具体的な卒業研究や企業での研究開発テーマに取り組んでみて、はじめて表出するものである。これまでの大学教育では、教官の私たちが学生諸君のこれらの能力を定量的に数値化することはもとより、君たち自身による自己分析さえなされてこなかった。・・・あえて断言するが、これは大学教育の怠慢である。専門教育の学習は必要最小限の教育であり、この現状に甘んじてはいけない。創造力の育成こそが、早急に導入されるべき教育内容である。“筆者は現状の山口大学の教育理念、すなわち「わかり易い講義」に疑問を有しており、能力のある学生が著者の求めるような創造力の育成に

とって非常にマイナスとなっていることを教授され、また筆者の教育の考え方に勇気付けられた。

7．授業の復権⁹⁾

本書第三章「書く」「読む」「話す・聞く」で本物の国語力—鍛える国語の中で、「鍛える国語教室研究会」を主宰する元北海道大学教授野口芳宏氏は「鍛える国語」を唱え続けていることを高く評価する。

“野口氏は教育技術研究という点で妥協しない。文部科学省の方針が如何に「ゆとり教育」にあろうとも「言語技術を鍛えることが言語人格の向上につながる」という主張は揺るがない（「言語人格」というのは野口氏の造語である）。・・・氏は「授業の主役は教師であり子どもは観客にすぎない」とってはばからない。”最後の言はわれわれ教員にすぐれた教育をすべきことを示唆しているように思われる。

8．大学授業の病理FD批判¹⁰⁾

多くの大学で学生による授業評価が実施させているのは、それなりの意義があるが、それを授業でいかに生かすかについては正解がないように私は思っている。本書第6章（学生による授業評価）の概念分析の中で、そのような思いに対する一つの有益な考え方が記述されており、少し引用しよう。“もし、このクラスでいわゆる「学生による授業評価」（以下、適宜、誤解が生じないかぎり「学生による評価」あるいは「学生評価」と略称する。）をさせたら、どうなるか。「授業の内容が理解できましたか。」「授業の内容は興味を持てるものでしたか。」などの項目には大多数の学生が強い否定の方向で応えるであろう。つまり、「理解できない。」「興味を持ってない。」と答えることになる。この「評価」

票を数量的に整理するのは簡単である。結果は機会的に出る。・・・

しかし、問う。この結果はどう解釈されるのか。何を意味していると解釈すべきなのか。(多くの「学生による評価」の実施の場合、まったく欠落しているのは、この解釈の理論である。)教師が悪いのか。私に言わせれば、そもそも「日本語すらあやしい」学生にドイツ語を教えるのが無理なのである。つまり、大枠であるあるカリキュラムが悪いのである。・・・このような大枠の問題には何も言わず、個々の授業にだけしか目が向かない「授業評価」とは、いったい何であるのか。授業評価は、カリキュラム評価、経営評価と連動していなければならない。授業は学校の機能の一部分である。・・・だから、FDで授業評価するなら、同時的・相即的カリキュラム評価・経営評価が行われなければならない。実態は、そうなっているか。また、学生に「授業評価」をさせるなら、カリキュラム評価・経営評価をも学生に行わせるべきである。学生が「顧客」であるなどという比喻モデルを使うなら、なおさらである。“筆者は、特に学生によるカリキュラム評価に新鮮さを覚えた。

9. 教育の論究^{11)~13)}

本書は7章からなり、教育学、教育原理、教育方法や教育行政等について執筆されており、教育の本質について論じられており、興味深いものである。日本語の場合、教育の語義は以下のものである¹¹⁾。教育の「教」は偏の上部は習う、または模擬するという意味で、偏の下部は子ども、そして傍の部分は鞭撻を表す。「教」という漢字は、子どもが成人となった者から規範となるものを真似る、ということである。

これに対して、「育」は子をさかさにした様子を表す部分と、そして肉月とが合成され

たものであり、子どもが頭から生まれ落ちるさまを、また健康な肉体を作っていくさまを表している。「教育」は、教育者が子どもと交わり励ます中で、健康な肉体をもって子どもが成長していく様子を表すことになる。

教育活動には人間の発達を援助するといった側面がある¹²⁾。ランゲフェルトは人間を「教育されるべき動物」と定義した。人間だけに教育が必要なのは、生物学的な特質に理由があり、本能が他の動物と比較して弱体化しているからである。

教員に求められる資質は、児童・生徒に対する教育愛と教育者としての使命であって、能力としては児童・生徒の発達についての深い理解と教科指導や生活指導に関する専門的な知識・能力であり、また人間としての広く豊かな教養である¹³⁾。大学教育でも、この必要性は言うまでもないが、大学では学生の生活指導の面が少々欠落していると思う。

10. 教育の挑戦¹⁴⁾

“新教育課程は、いわば大学にとっての設置基準のようなもので、高校以下の学校で行う教育内容の最低基準を示しているに過ぎない。それを誇張し、大学側が大変だと騒ぎすぎている面もなきにしもあらずではある。しかし、易しい(優しい)こと=良いことにならないよう心がけねばならない。

大学がこうした傾向を現実として捉え、直面する問題は、旧教育課程と新教育課程との格差を補充する補習科目を提供するのか、それとも従来の学力の前提として、今まで通りの科目を設定していくのかである¹⁴⁾。“山口大学は前者の方法の教育を実施しているが、その影響は従前の教育に少なからず与えている。筆者はもう一度、初等教育から高等教育を内容の濃いものに改めることを期待する。

11. 私の教育観37—日本の教育を再生させるために—¹⁵⁾, ¹⁶⁾

本書は第1章学校教育, 第2章家庭教育, 第3章社会教育から構成されている。討論形式で, 著名な作家数学者やジャーナリスト等が登場する。櫻井よしこ氏は「教師と生徒は平等ではありません」の中で, 「殺がれる子どもの向上心」について, また, 人によって差があることを駆けっこによって知りましたし, 速く走れる友だちを尊敬の念で見えていました。

誤った平等主義のもとで「子どもだから」とか「権利があるから」とか「自由だから」と言っていて, 嫌だったらやらなくていい, きつかったら頑張らなくていい, と甘やかされてきてしまったために, 人間の中に本来眠っている「よし, やってやろう」という気持ちが育ててもらえないんです。努力した後の達成感といった, 健全な動機付けがなくなってしまっているのですね。

この横並びの教育の中からは, 創造力豊かな人材や, 二十一世紀の日本を築いていくような頭脳は育つはずがないと思いますよ。“筆者もこのことを首肯するとともに, 大学教育で皆が理解できる教育は問題であるとかねてから思い, 平成18年度後期からの講義で, この点は改めている。

矢沢永一氏は「義務教育は諸悪の根源」の中で, 「読書の心得」について次のように述べている。“一つ目に, まず買いなさいということ。本は本屋の店頭でいくら見てもだめですね。特殊な資料のように図書館などを頼りにしなければならぬものは別にして, 自分の血となり肉となつてほしいと願うような本は, なんとか工夫して買うべきです。身銭を切って買った本は愛着ひとしおです。・・・二つ目が, 捨てることです。慎重に選んで買った本でも, 持って帰って読み出したら, 「実にツマラナイ」と慨嘆せざるを

えない場合があります。その場合は, 潔く捨てるべきである。¹⁶⁾” 学生諸君に本を読むように指導はしているが, 本の良さが彼らには伝わらず, 嘆かわしい。

12. マサチューセッツ工科大学¹⁷⁾

専門分野での経験が豊富で, 「ものごとの合理性」の感覚をもっているだけでは, まだ完璧なエンジニアとはいえない。この業界でのしあがろうとする人間はだれでも, 明快な文章が書けること, 外国語のひとつやふたつは読めること(この分野の研究と開発の中心は国外にある), 青写真が描けること, 幾何と三角法に精通していること, 力学と運動力学, ベクトル計算や対流といった実地的な物理の知識を身につけていること, などという条件を満たさねばならない。・・・MITは, その目標の幅広さによって, 他の教育機関とは一線を画していた。進級制をとり, 出版に出資し, 図書館とコレクションをもち, 展覧会を開き, あらゆる応用技術の前提となる科学原理の知識を提供し, そして地方へ科学知識を普及させることを目指したのである¹⁷⁾。“本文のアカデミックな面は, まさに工学教育にふさわしい。

13. 激震! 国立大学—独立行政法人のゆくえ¹⁸⁾

1999年に出版され, その内容も国立大学の独立法人化のゆくえに関するものであるが, 現在, 各大学は改革されてきた。東京大学文学部教授上野千鶴子氏は「高等教育再建の長期ヴィジョンを」について, “日本の文教予算が諸外国に比して貧困であることはよく知られている・・・そこに国立大学の法人化案が, 急速に浮上してきた。しかも行政改革路線で国家公務員の二五%削減計画の達成という「不純な動機」からである。

そのためにはまず基礎科学部門への長期的で大胆な資金の投入と、講座・学科の再編が必要である。学生のためには、まず共通一次を大学入学資格試験の一種と位置づけ、各大学の選抜の自主性と多様化を促進すること。・・・今回の「一大学一法人」の提案は、大学の多様化を招くであろう。¹⁸⁾ “この想像は必ずしも的を得たものとなっておらず、学生確保が地方大学で深刻化している。”

14. 教育とはなんだ¹⁹⁾, ²⁰⁾

さまざまな形で教育に関わる18名の教育関係者等の、それぞれの対談書であり、最初が荻谷剛彦氏に聞く「教育論」、最後が玄田有史氏に聞く「就職」という構成である。荻谷氏は“ただ、僕は「教育」を変えるチャンスはあると思っています。一つには、みんなが少しずつ「教育」を理想論だけで語らなくなったから。もう一つは、これだけ中央がやっていることに対する不信感がつのると、もう自分たちでやるしかないと思うじゃないですか。お上に頼らずにやっていくための自立する意識と、それを支える制度的な基盤がだんだんできつつあるんだら無力感に陥って、「しょうがないから子どもは私立にいかせるか」になっちゃったら、日本の公立学校はおしまいですよ。・・・インタビューの途中、ちょうど二十年後の社会が話題になったときに、荻谷剛彦さんは言った・・・刈谷さんは、全国三万人の大学生による「日本のナンバーワン・ティーチャー」に選ばれている。大学生に居眠りをさせない授業の魅力は、おそらくそう簡単には数値化できないであろう。「教室の中の子ども(学生)の目がいきいきとしているか」の印象論の分野でも実績を残したうえで、「教育」の別の語り方も提唱する。個別な教室の現場を知悉しつつ、それを集団化して見直す手続きも怠らない。¹⁹⁾ “口幅ったいかもしれないが、私も学生の目

が輝いているときに、彼らの学習意欲や熱意を感じる。

東京大学大学院教育学研究科教授佐藤学氏は「学校改革 すべての場所に学びの共同体を」の中で、“・・・かつての日本は、学校と教師の信頼度と尊敬度は世界的にトップレベルでした。学習意欲もトップレベル。ところが、圧縮された近代化が崩れてしまうと、一挙に逆の方向に行く。学校や教師への不信感が広がり、学ぶ意味が見失われるようになり、僕が指摘している「学びからの逃亡」が起こってくるわけですね。現在に至っては、もはや日本の子どもたちは世界一学ばない子どもになってしまいました。²⁰⁾” 学ぶこと以外への遊びの誘惑が子どもをひきつけて放さないのではと、著者は思う。

15. ゆとり教育が日本を滅ぼす²¹⁾~²⁴⁾

ジャーナリスト櫻井よしこ氏と国語作文教育研究所長宮川俊彦氏の対談集である。本書の構成は次のとおりである。第1章「ゆとり教育」がなぜ問題か、第2章エリートを否定した国の歪み、第3章文科省と教師、その罪と罰、第4章この親にしてこの子あり、第5章教育における温故知新。

宮川氏は「結果の平等はあり得ない」の中で以下のように述べている。“・・・むしろ、教育の場では、努力した人間と努力しない人間の差をしっかりと教えなければなりません。教育の本質はその差を教えることにあります。・・・平等という概念は、皆同じということではありません。平等というのは機会の平等であって、結果の平等というものではありませんし、個性というのはその「差」の集大成ですから、その差を認知しないと、そもそも教育は始まりません。²¹⁾” 山口大学工学部の教育理念(姿勢)の一つに皆に理解できる講義が謳ってあるが、個人的には抵抗があった。まさに、宮川氏はこの点をうまく表

現している。

櫻井氏は「頑張る子どもが評価されない社会風潮」の中で次のように指摘する。“・・・頑張る子どもが評価されないことも問題です。日本は教育だけでなく、社会全体がそうなっていますね。伸びる人、成功する人をできるだけ押さえつけ、平均値に向かわせようとする悪弊が強いことが目立ちます。世界広しといえども、こんなことをしている国は珍しいと思います。²²⁾”

「教師の育成法が肝要」において宮川氏は“教師にかぎらず、高齢者の登用は大賛成ですね。・・・さて、教師にとっての大事な資質は、信念とか大きな視野を有していることだと思っています。しかし、存在感のない教師ばかりが居残るといった傾向が強い。企業も役所もそういう人が多いのではないのでしょうか。また、教師同士でぶつかりあったりする場面もなく、真剣で懸命であることはよくないという風潮になっています。ほどほどに納得して働けばいいという心情が、多くの現場でみられているのです。²³⁾” 厳しい批評だが、耳を貸さねばなるまい。

「自由と義務、権利と責任のバランスの回復を」の中で、櫻井氏は次のように指摘する。“・・・教育基本法見直しの議論では、社会的意識を国民に芽生えさせていくことがもっと強調されてよいのではなんでしょうか。・・・何のために人間は教育を受けるのか。教育の目的は知性を高め、自分を磨き、個人として充実した人生を過ごすとともに、社会や国のためにも力を貸すことのできる人間を育てることです。人間は動物のように、自分の欲望を達成するためだけに知恵や手段を磨くわけではありません。他者を思いやることのできる人間の人間たるゆえんです。こうした意識を育むということを、教育改革の議論でもっと強調してほしいものです。²⁴⁾” 教職員と学生がこの教育の考え方に耳を傾け、自問自答してみたいものです。

16. 大学教育学²⁵⁾、²⁶⁾

序に記載されているように、本書でいう「大学教育学」は、大学教育の実践を扱う教育学の新たな分科である。本書の章立ては次のようである。1章大学教育学とは何か、2章大学授業論、3章大学教育評価論、4章大学カリキュラム論、5章ファカルティ・ディベロップメント論—大学教育主体の相互形成—、6章学習主体形成論—学生の世界から大学教育を考える—、7章学生支援論、8章大学教育メディア論。

2章において“授業は、授業者と受講生との相互行為である。しかし、この特殊な社会的相互作用の様式は、多くの大学ではそれとして十分に自覚されないままに教育者集団によって共有されており、しかも同じように無自覚なままに継承されている。・・・なぜこのように、旧態依然たる一方通行の授業法だけが優位でありつづけてきたのか。いくつかの理由が考えられる。第1に、近代大学においても近代学校固有の一斉授業方式がじょじょに受容され、講義スタイルが、定型化された授業方式として受容されたこと。第2に、東アジアの儒教文化圏では伝統的に、授業の「変容の様式(transformative mode)」（学習者の思考態度や探求方法の形成を重視する授業系様式）よりも「模倣の様式(mimetic mode)」（知識や技能の伝達と習得を重視する授業形式）が優位でありつづけてきたこと。第3に、急速な近代化に向けて欧米の権威づけられた既成の知識技術を大量に伝達し、官僚や企業家や技術者など近代的セクターの担い手を多量に育成するためには、一方通行の講義という権威主義的で効率的な伝達方式がもっとも有効であると考えられてきた。²⁵⁾” 大学教育を根源から考えるうえで必要であると思い、長文にわたり引用した。

次に3.2で教育評価における現状と問題点を論じている。“以上のように価値や文脈

と深く関連している大学教育は、実際にどのように評価されるものか。これは、考慮しなければならない多くのことを含んだ、難しい問題である。第一に、どこまでを評価されるべき「教育」として考えるのかという評価対象の範囲設定の問題がある。大学ではカリキュラムが組み、授業が行われている。このように明示的に与えられる教育を評価の対象とするべきであろうか。いや、教育とは授業だけでない。教員と接するとき、研究室を尋ねていくときなどにも、教育は行われているし、学生は図書館でも学んでいる。このように、暗示的に学生に与えられる「教育」すべてを含めて評価すべきだろうか。たとえ範囲を決定したとしても、何を基準(指標)として評価するかといった評価指標の設定の問題がある。どんなに素晴らしい教育が与えられたとしても、実際に「教育の効果」がなければ、その教育に意味があるといえるのだろうか。・・・

このように大学教育評価には、解決のつかない多くの問題が内在している。重要なのは、大学教育評価を行ったりそれについて考察したりするときには、このような解決のつかない問題が内在していることを意識化しておくことである。²⁶⁾工学部で実施されている学生による授業評価の内容についても種々意見のあるところであるが、教育評価をすることは現実に可能であるかをわれわれ教員は考えおくことも必要であると思う。

17. 授業改善を改善せよ²⁷⁾~³¹⁾

本書のタイトルに魅かれて手にした一冊である。サブタイトルは“学習者レスポンス分析の理論と展望”となっている。“著者はここ10年の間、学習者レスポンスの研究に携わってきた。・・・冒頭に学習者レスポンスと書いたが、これは学習者の授業に対する感想を意味する。・・・いま、教育の危機が伝

えられ、大学は淘汰の時代にあり、小中高では学力低下が問題視されている。これらの問題の本質はどこにあるのか。子どもの個性を重んじた絶対評価が叫ばれ、興味・関心・意欲・態度で評価しろと言われるが、その裏には、人間が認められたときにこそ本当の喜びを感じて活性化し学習するという真理が隠されていると思う。そのためにも、教え、教えられる関係の構築こそが、真の教育環境作りだと考える。そのような状態を作ることこそが授業改善であり、教育改善だというのが私の主張である。²⁷⁾”この著者の主張には含蓄があると思うが、筆者は教育においては学生の自らの思考の発展をサポートするものであると考えている。したがって、授業中、個々の課題に対する学生諸君の取り組みにそれほど神経質になる必要はないと思っている。

第2章の「授業改善を改善せよ」において、まず、大見出し「優れた授業を読み解くために」小見出しを列記しておこう。①「あの先生だからできる」授業、②属人ノウハウを越えて、③改めて問う・授業とは、④授業というコミュニケーション~その3つの側面~、⑤「分かる」授業のために、⑥舵を切るには前を見よ、⑦情報KRと学習意欲、⑧薬と処方の方に、⑨学びを活性化する「情動エンジン」、⑩「学習者レスポンス」をもとめて²⁸⁾。

⑤「分かる」授業のためにの中で、“著者は授業中のコミュニケーションにすれ違いが多いと書いたように、教師の側は往々にして「講義で話したことだから分かっているはずである」などと無意識に考えてしまいがちなものだ。しかし、本当に「分かる」ためには、「分かったつもり(=受容反応)」ではなく、与えられた情報を学生自ら咀嚼し、自分のものにするというプロセスが欠かせない。授業が本当に目的とすべきなのは、学生の構成反応を生み出すことなのだ。”²⁹⁾講義で理解できなかった授業内容は復習の過程でな

されるべきであり、それでも理解ができないときには教員に直接質問すべきであると、というのが筆者の持論である。授業中にすべての内容が理解できる授業は逆に味気ない。この授業後の復習がなされていない実態が大学生の多くが授業内容を十分に理解していないことに大きく関与していると言いたい。

第3章学習者レスポンス取得の試みにおいて、「問うこと」と「聞くこと」で私は現在の工学部で実施させている授業評価の方法に対する問題について、本書から解決法を学ぶことができた。それは““学習者レスポンスと一口に言っても、定型化した設問を投げかけるだけで有意なレスポンスが収集できるわけではない。「信頼される医師」のように、個々の学習者に対して、どれだけ適切な発問を行い、その対話の中からくみ上げた情報を、しっかりと学習者にフィードバックできるかが非常に重要である。「よく聞くこと」は「よく問うこと」なしに成立しない。このことを認識しておこう。”³⁰⁾

“著者は1997年から4年間に渡って、学習者の所感をカードに記入させ、それを学習カルテとして自己分析させる方法に取り組んだ。この取り組みにおいて、まず考えねばならないのは、コメントが学生の本音を反映しているのかという点だろう。コメントの内容が学生の成績になら影響しないことを周知させている。学習カルテは授業の終了後ごとに5～10分の時間で記入させた。回収した学習カルテには、授業のたびに教員が学生からの質問に答え、不安や心配の表白には、激励や慰めのコメントを与えた。クラス全体、あるいは学年全体に有効だと思われる質問や指摘に関しては、次回の授業ですべての学生に説明し、授業改善の実行に反映させた。さらに、著者は収集した学生のコメント分析を進めていく中で、それらを4つカテゴリに分類できると考えた。A) 学習に対する感情にかかわる発話、B) 自己評価の表象にかかわる発話、

C) 学習内容の理解にかかわる発話、D) 学習対象と自己との相対的な位置にかかわる発話。”³¹⁾現在のわれわれの実施している授業に、このような発話が導入できれば最高のことと思う。ただ、今まで以上に教育に割く時間が大幅に増え、研究等に割く時間が大幅に削減されることは必死であり、こういう点から見ても教育の実態の難しさを改めて教えられる。

18. 教師教育の創造³²⁾

著者稲垣忠彦氏は45年にわたって教育現場を訪ね歩みつつ授業研究を重ね、早くから現場教育の重要性を説いてきた。本書カバーの袖に書かれた教育改革の鍵—それは教師改革。ずっしりとした重みに考えさせられる。

著者は教師の成長ということの中で次のように指摘している。“教師の成長、プロフェッショナル・ディヴェロップメントは、今日、内外において教育改革のキーワードになっている。とくに、現在注目され、その方策が模索されているのは、すでに教職にある教師が成長を目的とする現職教師である。日々の教職生活のなかでの、一人ひとりの教師の、そして共同での成長が求められており、それは教職というプロフェッションの成長、それをとおしての教職への信頼を高めていく、ほとんど唯一の方法とさえいえると思う。・・・授業実践について考えよう。授業という行為を具体的に考えるとき、まず特定の、固有名の教師が、特定の子ども、その集団を対象に、特定の教材にもとづき、特定の場、特定の時間におこなう、複合的・選択的行為である。それは、その教師の個別的・自立的選択にもとづくものであり、それゆえに実践の主体である教師の責任がともなうのである。授業は決められた手続きの履修や、ルーティンワークではなく、教師の持ち味や創造性が生かされる仕事である。”³²⁾少々長い引用に

なったが、授業は教師の個性が反映できるという主張であり、私もこの点にも手を挙げて賛同する。いわゆる画一的な授業への批判として受けとめたい。

19. 教育実践³³⁾

中学生のよる授業評価を取り入れた授業改善に関する例のポイントを引用しよう。“社会科歴史的分野「古代の日本」の実践において、公地公民制を大きく2つの段階で構成した。山口大学付属光小学校も含めた本付属光中学校では、このような、課題追及に有効な手法のことを「追求スタイル」と呼んでおり、すべての教科において「追求スタイル」を認定して授業で活用している。「歴史の流れ」の終末段階で、単元を通して学んだ学習内容と、その学習内容を獲得するために活用した方法(追求スタイル)を振り返らせる授業を行っていた。追求スタイルによる評価は目の前の学生の学力をのばすことが最大の目的である。・・・特に、「追求スタイル」の開発とは、各教科における有効な学び方を明らかにするといふことである。”

本誌編集者はこの実践の見どころとして、“・・・いずれにしても、教師が生徒の主体性を保障し、能動的な学びを求めていくとき、生徒の「追及スタイル」を、授業を通して究明している吉岡実とは価値ある実践である。³³⁾”筆者はこのような教員と生徒が一体になってはじめて良い授業が成立すると確信させられた。

20. 国語教育^{34), 35)}

筆者は授業を進めながら大学生の共通・専門科目の理解力の低下には国語力の低下が大きく関与していると実感している³⁶⁾。国語力の低下は活字離れに通じる点がある。教科書に書かれている文章を読むことにさえ、拒

否反応を示す学生も多々ある。

月刊誌「国語教育」に“「多読」へ導くための授業の改善”から読書の大切さ、活字離れについての方法を引用しておこう。埼玉県春日部市立武里南小学校の深谷幸恵教諭は、小学生中学年に対して“習慣付けと確認型の授業で多読”という論文の中で、読むことの授業を解説でなく確認型で進めることを実践している³⁴⁾。すなわち、1 図書室で本を借りる習慣をつける。2 図書室で授業を行う。3 読みの授業の解説型から確認型へ変換する。結びとして、“毎日の繰り返し”で、本を借りる習慣作り、図書館で授業をすることで本を手にする機会を増やす、読むことに自信をもたせ好きにさせる授業について述べた。毎日繰り返し行うことで少しずつ身につく効果をねらっている。筆者もこの考えに大いに共感を覚え、大学生が1日、1回は読者しないと気がすまないという習慣を身に付けてくれることを望む。

兵庫県淡路市育波小学校の柏木英樹教諭は、小学校高学年に対して論文“スタートダッシュで一気の10冊読破させよ”の中で、「子どもを本好きにする」には最低限次の「七つの原則」が必要であると考えている³⁵⁾。原則1 読書意欲喚起の原則、原則2 読書目標の原則、原則3 本常時設置・保持の原則、原則4 本刺激継続の原則、原則5 読書確保時間確保の原則、原則6 読書記録の原則、7 読書激励の原則。このように読書することの大切さを原則とすれば、大学生の読書意識も変貌するのではないかとも思う³⁶⁾。柏木英樹教諭は読書確保の時間が最重要であり、読書習慣を継続することが難しいことを指摘された³⁷⁾。

21. まなびと教え^{38), 39)}

本書は国民教育文化総合研究所によって、2003年4月に「学びの論理と文化」研究会を

設置し、2年間にわたる論議を重ね、中間報告『あしたの学びを考える』と最終報告『学びと教えの分裂をどう超えるか』を踏まえてまとめられている。

最終報告では次の三項目の提言がつけられています。“つながりを発見し、つながりを深めよう。生活の中の諸経験と学問知の、知識と知識、教科と教科の、自分の思考と他人の思考の、地域と学校の、実践と実践の一つなぐこと、紡ぐこと、それが教職員の仕事だ。学ぶことと教えることは、一体の行為である。学ぶことの豊かさ、楽しさを、身をもって実感し、示すこと、それが「教える」ということの本质だ。自分の中の「子ども」を大切に育てよう。挑発しつつ、学び手の「語り」をひきだそう³⁸⁾。”教えることと学ぶことが生き物のように感じられる、すばらしいまとめだ。

学びを豊かにする教え（教育）については、“感じたことや生活的な経験によって収集獲得されたものは、それだけでは、まだ意味づけされていない情報のかたまりでしかありません。それが知的な財産となるためには、再分節化（一度バラバラにして並べ替える）や意味づけ、相対化や客観化、批判と選択などの編集の過程を経ることが必要です。・・・自らの豊かな学ぶ力とともに、相談に乗り、示唆したり、助言したりして、ともに学んでくれる存在が必要です。・・・これが学ぶ側が求める、または必要とする教え（教育）です。学ぶ側から言えば、学びを豊かにするためにこそ教えや教える人がいるのです。学ぶものにとって、優れた教育や師と出あえることは、学びを豊かなものにするための、きわめて重要な条件なのです。³⁹⁾”誰しも優れた教師の出会いはあったはずであるが、その良いめぐりあいが前述したつながりに必ずしも結びついていないために学生は学ぶという主体的な行為を身につけていないように思えてならない。

22. 教師大村はま96歳の仕事⁴⁰⁾

講演「学力低下」の声を聞きながら（2002年8月17日鳴門教育大学）の中で、“・・・私たちは国語教師です。何も国語教師によって教育が動くわけではないですが、どんな科目でも言葉なしの授業なんていうのはない。どんなハイカラな授業でも、言語がその元になります。それだけ国語教師は責任を持ちたいと思います。言葉なしには授業はできないんです。ですから言語を確かなものにして、日本のある一面を切り開きたい。それは教師でないとできないことなんです。お説教をやめて、身をもって、体を張って、動いて、話し言葉をしっかりしたものになりたいとおもっております。・・・⁴⁰⁾”今の大学生の国語力の貧弱を考えると、非常に有意な話であると筆者は思う³⁶⁾。

23. 教育は再生するか再生するか^{41),42)}

Voice 11号に標記のことについて多方面にわたる論客の話がある。著者と題目を掲げるが、これからも教育の考え方は多面的でなければならぬことを学ぶことができる。①茂木健一郎氏（脳科学者）：脳の栄養は「生の体験」にあり、②山谷えり子氏（衆議院議員）：祖国の美しさを子供に語たれ、③山折哲雄氏（宗教学者）：古典に学ぶ日本人の信仰心、④中村修二氏（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）：ノーベル賞は大学入試廃止から、⑤平尾誠二氏（神戸製鋼ラグビー部ゼネラルマネージャー）：スポーツで遊んで創造力を、⑥服部幸應氏（服部栄養専門学校校長・医学博士）：食卓を通じて学ばせる作法、⑦金田一秀穂氏（杏林大学教授）：「ことば科」で感性を伸ばそう、⑧門川大作氏（京都市教育委員会教育長）：学校現場は「共汗」で活気づく。金田氏は次のように指摘する⁴²⁾。“・・・国語という名前を、

日本語に変える動きが少し前にあった。国語学会という最高の権威集団が日本語学会というふうに変えた。・・・私は「国語」を「日本語」にかえるのではなく、いっそ「国語」を「ことば」と変えてしまうのがいいのではないかと思う。そうして、ことばの働きについて教える科目にしてみたらどうだろうと思う。・・・ことばで伝え合う、ことばで考える、ことばで分かり合う、ことばで感動する、ことばで調べる、ことばで作り出す、そういう単元によって、これからの子供は、自分たちの感じ方や考え方、行動の仕方を、より客観的に理性的に理解することが可能になり、また自分たちの感性をより広やかに伸ばしていくことができるのではないか。”このことが実現すれば初等・中等・高等教育の授業も一貫性を持って実り多くなることが可能ではないかと筆者は考える。

むすび

平成14年に実施された“ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム21世紀創造”において、江崎玲於奈氏は基調講演のなかで“自分から学ぶ姿勢が大切であること”を話された。本論文で取り上げた教育に関する書籍・雑誌の多くは授業の進め方により学生の理解度を高揚させるものであり、また教育とはどうすればいいのかを論じたものである。筆者は教育学を学んだ経験は全くないが、同フォーラムの中での利根川進氏の発言“物まねから始まる創造的研究”に共感を覚え、まず教育・授業に関する書籍・雑誌に目を通すことを前論文に引き続いて行った。

現在の初等・中等教育を受けてきた大学生への授業では従来型の教員主導型のもは学生の理解度が向上せず、教員・学生双方向型のものへと転換することが必要であることを教えられた。一方で、教員の個性ある授業も必要である。さらに、授業の内容の理解には

国語力の重要性が大きく関与していることを切実な問題として筆者は捉えている。

教育の原点は学生諸君が自ら積極的に学習する姿勢にあると主張したい。学生諸君が理解できないことは積極的に教員室に質問に行くことが当たり前となる教員・学生の学習緊密度が高くなる教育を推進することが大切であると主張したい。

(大学院理工学研究科 教授)

【参考文献】

- 1) 山本哲朗：教育・学問・自然科学についての考究、山口大学教育機構、No.3、pp.23～37、2006.
- 2) 無藤 隆：巻頭論文 いま求められる「教師力」とはなにか、悠、6、pp.12～13、2006.
- 3) 安彦忠彦：ふだんの生活につながる学習習慣づくりを、悠、9、pp.12～13、2006.
- 4) P.J.Palmer (吉永契一郎訳)：大学教師の自己改善 教える勇気、玉川大学出版部、pp.19～21、2000.
- 5) 山折哲雄：教えること、裏切られること、講談社現代新書、pp.199～200、2003.
- 6) 山本哲朗：伝承したい学問における先達、榊、pp.9～11、2004.
- 7) 山本哲朗：伝承したい科学者 科学する心を育てる場、科学、Vol.74、No.7、pp.814～815、2004.
- 8) 塚本真也：創造力育成の方法—JABEE 対応の創成型教育—、森北出版、pp.23～24、2003.
- 9) 森口 朗：授業の復権、新潮新書、pp.71～72、2004.
- 10) 宇佐美 寛：大学授業の病理FD評価、東信堂、pp.110～111、2005.
- 11) 乙訓稔編著；大澤 裕・勝山吉章・大庭茂美：教育の論究、東信堂、pp.11～15、2006.
- 12) 同上、pp.23～24.
- 13) 同上、pp.33～34.
- 14) 小原芳明：教育の挑戦、玉川大学出版社、pp.97～98、2005.
- 15) 学研「教育ジャーナル」編集部編：私の教育観37—日本の教育を再生させるために—、学習研究社、pp.35～36、2000.

- 16) 同上, pp.326~327.
- 17) フレッド・ハブグッド(鶴岡雄二訳): マサチューセッツ工科大学, 新潮社, pp.48~49, 1996.
- 18) 岩崎 稔・小沢弘明: 激震! 国立大学—独立行政法人化のゆくえ, 未来社, pp.100~101, 1999.
- 19) 重松 清編著: 教育とは何だ, 筑摩書房, pp.21~23, 2006.
- 20) 同上, p.128.
- 21) 櫻井よしこ・宮川俊彦: ゆとり教育が日本を滅ぼす, ワック, p.27, 2005.
- 22) 同上, pp.29~30.
- 23) 同上, pp.119~120.
- 24) 同上, p.125.
- 25) 京都大学高等教育研究開発推進センター編: 大学教育, pp.21~23, 2005.
- 26) 同上, pp.41~42.
- 27) 塚本榮一: 授業改善を改善せよ—学習者レスポンス分析の理論と展望—, ジャストシステム, pp.3~5, 2006.
- 28) 同上, pp.26~45.
- 29) 同上, p.33.
- 30) 同上, p.50.
- 31) 同上, pp.53~58.
- 32) 稲垣忠彦: 教師教育の創造 信濃教育会教育研究所五年間の歩み, 評論社, pp.170~171, 2006.
- 33) 吉岡智昭: 生徒による授業評価を取り入れた授業改善の実践—古代の日本の学習を通して—, (附) 山口県教育会, 教育実践, 10, No.1139, pp.24~27, 2006.
- 34) 深谷幸恵: 習慣付けと確認型の授業で多読へ, 教育科学国語教育, 明治図書, No.675, 12, pp.44~47, 2006.
- 35) 柏木英樹: スタートダッシュで一気に10冊読破させよ, 教育科学国語教育, 明治図書, No.675, 12, p.48, 2006.
- 36) 山本哲朗: 大学生の国語力を危惧, 讀賣新聞, 気流, 2006.11.25.
- 37) 私信: 柏木英樹
- 38) 長谷川 孝: まなびと教え, 現代書館, pp.10~11, 2006.
- 39) 同上, p.70.
- 40) 大村はま: 教師大村はま96歳の仕事, 小学館, p.24, 2005.
- 41) PHP 研究所, Voice 11, pp.78~79, 2006.
- 42) 同上, pp.92~93.